いつの日にか還る
……嗚呼タイムマシン

平井和正

DIGITAL NOVELS
LUNATECH

「さて、弱ったぞ」
偉大な教授は、顔中を埋めた濃い黒髭を撫ぜまわしながらぼやいた。研究室の真ん中には、機械の見る悪夢を想わせる奇怪な形相を呈した代物が据えつけられていた。遠目に見てもなんだかわからず、近くに寄れば更にわけがわからない、輻輳した、形容を絶するモノである。これこそ教授が精魂を傾けた苦心の成果、いわゆるタイムマシンである。
「このタイムマシンさえあれば、時間の流れに乗って更に加速させ、好みの時代へ行けるのだ」
教授は、学生たちを前にした時の滑らかな口調でいった。しかし、研究室に居合わせるのは、顔が瓜のようにひたすら長い、たった一人の助手だけである。
「これ以上の発明はもはやこの先数万年はあるまい。タイムマシンで未来はことごとくお見通しになる。科学の進歩発展に無駄な時間を営々と費やす必要はもはやない。未来へ出かけて教示を請えばよいのだからな。どうだ？　お前もタイムマシンの威力のほどがわかったろう？」
「仰せの通りです」
ひたすら顔の長いたった一人きりの助手が、打てば響くように賛意を表した。単なる条件反射なのである。
「先生こそまこと、人類の救世主であられます」
「当然のことをいわんでよい。わしはこのタイムマシンを

公開して、世人をことごとく驚倒させてやる。何万人、何十万人も並べて将棋倒しにな。ところで、ただ一つ、わしを困惑させることがあるのだ」
「と申しますと？」
「いや、それがさ。わしの助手のおまえに頼みがある。おまえにしか頼めん重要な仕事なのだが」
「えーっ、重要な仕事と申しますと？」
すでに助手は警戒し始めていた。経験上、教授の頼みが常にろくでもないことを肌身で心得ているのだ。
「いや、たいしたことではない。このタイムマシンの操縦をする実験者が必要なだけだ」
教授の目がぎょろぎょろと陰険に光った。
「なに、ちょっとしたことだ。おまえ、このタイムマシンの操縦をやってくれんかな？」
猫なで声だったが、助手の非常に長い顔はさあっと音をたてて血の気が引き、早生の真桑瓜そっくりになった。
「それは困ります、先生……ぼくには扶養する義務のある年老いた両親がいます。ぼくがいないと両親は餓死してしまいます。お願いですから、それだけはご容赦ください」
助手はじりじりと後ずさりした。そのままくるりと背中を向けて全力疾走しかねなかった。
「すると何か、おまえはこのタイムマシンの実験が必ず失敗する、と信じておるわけだな？」

教授の不機嫌になるさまは不気味な迫力があった。まるでみるみるうちに圧倒的な化け物に変じるような恐ろしさだ。その恐ろしい顔を見るのが怖くて、助手のなり手がいないくらいだ。

「いやだというのか？　崇高な科学の進歩に、わしの弟子ともあろうお前は手を貸さんというつもりか？」

「いやですいやです、それだけは勘弁してください」

顔の長い助手は恥も外聞もなく泣き声になった。

「馬鹿者、クビにしてしまうぞ」

教授の顔が紫色に変じた。怒鳴り声とともに濃い髭に囲まれた真っ赤な口から唾の飛沫が怒り狂ったように、助手の長い顔に飛び掛かっていった。

「この裏切り者めが。忘恩の徒めが。逆賊。間男。こっそりわしの美しく若い妻の手を握ったろうが。ちゃんと知っておるのだぞ」

「あれは、お転びになった奥様を助け起こしたのです」

「不埒な下克上者め、わしの妻に懸想したあげくラブレターを送りおって」

「あれは嘆願書です」

「姦婦姦夫め。重ねておいて四つにしてやろうか。それでもいやというか」

「なんとおっしゃられようと、私は六年前からお給料を戴いておりませんからね。奥様に差し上げたのはお給料を払

ってくださいとの嘆願書です」
　それをいわれると、教授はいささか弱かった。タイムマシン建造のため、すべての研究費を注ぎ込み、あまたの協力者を失ったのもそれがゆえである。長い顔の助手は、最後の生き残りなのだ。
「偉大な科学の栄光の前に、たかが給料がなんだというのだ。わしのいう通りにすれば、永遠なる科学の礎にお前の名前を刻み込んでやるぞ」
　さすがの教授も弱気になって、懐柔を試みたが無駄であった。さすがに最後まで残っただけあって、顔の長い助手は頑迷この上なかったからだ。
「やむを得んな」
　教授は諦めのため息をついた。助手に支払う給料を全部使い込んでしまったのである。
「わしがタイムマシンの栄誉ある操縦者第1号になろう。よいか、真の科学者の勇気は、決して多寡の知れた危険を恐れたりはせんのだ。それがたとえ、実験の成功率が一パーセントを切ろうともだ」
　道理で顔の長い助手を乗せたがるわけであった。助手は悲しげに長い顔を振り、同時に安堵のため息を漏らしていた。
「先生、思い止まるなら今のうちですよ。申し上げるのが遅れましたが、この研究所は明日から封鎖されます。電気

水道ガス、支払いがすべて滞っておりますからね」
「それでは今すぐ決行せねば間に合わんではないか。なぜ黙っていた？」
「それを聞けば先生が思いなおしてくださるかと思いまして」
「馬鹿者。何をいうか、それを聞けばますます決行に踏み切るしかないではないか。もうよいわ。わしは科学にこの一身を捧げるぞ」
顔面は紫色のまま、教授は強がりを吐いた。しかし、強烈な黒髭はさすがにしおたれてしまっていた。成功率一パーセント以下ならだれでもそうなる。
顔の長い助手は、教授が機械の見る悪夢のようなタイムマシンに這い込むのを、涙を浮かべて見ていた。
「わしは五十年後の未来へ行くぞ。そして八十歳のお前のしなびた瓜のような顔を見てくるとしよう。その頃、わしは百十歳を超えているはずだが、どっこいわしはこのままの若さなのだ。せいぜい羨め。わしは永遠の若さを手に入れるのだ、どうだ、これを聞いてもまだ心変わりはせんか？」
「絶対にしません。ご機嫌よう、先生、どうかご無事で」
「わしはこのすばらしい栄誉を独り占めすることに気が咎めるのだ。どうだ、もう一度チャンスを与えてやるが」
「まだいってる。どうぞ、ご心配なく」

教授は機械の見る悪夢が終りを告げたように、唐突に存在をやめた。そこには借金のカタになるべきなにものもなくなっていた。それっきりだった。

顔の長い助手は、我慢強く閉鎖された研究室で教授の帰還を待った。実に五十年の年月が流れていった。顔の長い助手の頭部には白髪さえ残らなかった。八十歳の老人となった助手は、ロッキングチェアに腰をおろして、ひたすら待ち続けた。世間は完全に教授の冒険行など忘れ去っていた。五十年の年月は一切の記憶をぬぐい去るのに十分である。

教授が帰還したのは、正確に五十年目であった。禿頭白髭の高齢の年寄りになった助手は、教授の帰還に驚きもしなかった。あまり待ち続けたもので、どうでもよくなったようである。

突如、研究室の埃だらけの床に出現した、機械の見る悪夢のようなタイムマシンから這いだしてきた教授は、全身埃まみれになってしまった。

「五十年間掃除をしなかったな、馬鹿者め、掃除をせんか。この怠け者めが」

五十年分の分厚い埃に、ごほごほと咳き込みながら、教授は第一声を叱責で放った。

「お前、ずいぶん年をとったな。見違えたぞ。乾燥瓜みた

いだ。そうか、今のお前は年齢でいうとわしより三十歳も年寄りなのだな。わしの父親みたいだ」
「先生、お気の毒です。先生のお父上は二十年も昔に亡くなられました」
「そんなことはどうでもよい。わしはやったぞ。大成功をおさめたんだ」
教授は、年老いた弟子が目脂で塞がった目から涙を流しているのを、不審げに見た。
「お気の毒だと？　お前ボケたな。わしはこの通り、タイムマシン運行実験に大成果をおさめたのだぞ。わしの母親も死んだか？」
「お亡くなりになりました。奥様も亡くなられました。お気の毒です」
「お前はわしがタイムマシンを実用化させたことに気づいておらんな。わしの愛する若い妻が死んだからどうだというのだ。わしはこれから急いで戻って、お前が妻と間男する現行犯をつかまえてやる。それからわしがどうすると思う？」
「重ねておいて四つですか？　そんなことはもはやどうでもいいんです。先生のお考えになっていることは全部だめになりましたから」
「何をいっとる。何がだめだ？　わしがタイムマシン運行に成功したことが、おまえのボケ頭にはしみ込んでいかぬ

らしいな」
「そうじゃありませんが、とにかくもうだめなんです」
助手が嗄れ声でいった。埃を教授が巻き上げたので喉をやられたのだ。
「もう帰れませんよ」
「たわごとをいうな。わしは帰るぞ。帰ったらまず一番になにをするか、わかっとるな。役立たずのお前をクビにするのだ」
「だから、もう帰れませんといってるのに」
「なぜだ？　ボケ老人と話すのは疲れるぞ」
「ですから、先生は今、お帰りになったんですからね。私はそれを教えて差し上げようと五十年もお待ちしていたのです」
「帰ったらいかんとでもいう気か？」
教授は怒鳴ってから、真相に気づき顔面から血の気が引いた。
「そうか！　わしは帰還しなかったのだな？　それが既成事実なのか！」
「まことに残念ながら、そうなんです。先生が帰還なさらなかったということは、つまりタイムマシンが一方通行だということを意味します。未来へタイムマシンは行けます。でも過去へ逆行するのはだめです。それは不可能なのです」

「じゃ、わしの大発明はどうなるんだ？　公開実験は？　タイムマシンの発明者としてのわしの名誉は？」

教授は頭髪を掻きむしりながら死に物狂いでわめいた。わめきながら、すでに恐ろしい真相に達していた。

「先生、本当にお気の毒です。もう少し近い未来になされば よかったんですよね。たとえば五分後とか。それが五十年のタイムスパンを選ばれたのが致命的でした。先生の発明はもうはるか以前に時代遅れになってしまったんですよ」

終

追記

この作品は昭和三十七年七月に発行された「季刊宇宙気流」（ＳＦマガジン同好会発行）に掲載された。

この作品は一度も活字化されていない。面白いから短編集に入れればよいのに、といわれたこともあるが、そうはならなかった。単に私の不精のため掲載誌が見つからなかっただけなのだが。実家の「タイムカプセル」の中だったのだ。

したがって、これが公式には最初の発表となる。

いつの日にか還る
……嗚呼タイムマシン

デジタル版

発行日　２０００年５月８日
著者　平井和正
イラスト　長尾 太
デザイン　ルナテック
発行　有限会社ルナテック
〒１２５―００４１
東京都葛飾区東金町３―13―６
info@ebunko.ne.jp
http://www.ebunko.ne.jp/

（C）KAZUMASA　HIRAI、FUTOSHI　NAGAO、LUNATECH
※本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。